

夢みたいな夢みたい

佐伯実琴

——マツチ棒の軸——

体温を測る

熱が無い

明日、自然現象の何もかもが同時に起きたらいいのと思う
嘘、起きないでね

僕の言葉に意味も何も生まないでね

——マツチ棒の先——

結局僕は冷蔵庫の扉を指先で開け閉めすることはできるのに、その中身を認識することがいつまでもできなくて、新しく清潔な色をした店から毎日事物を運び込むことをしている

物質が状態変化するなら僕の部屋はいつも秋で、嫌な汗をかく夏に取り残されたみたいな気配と、急いで冬支度をしないとイケないみたいな気配が同時にして、それで「そもそも今年は『よいお年』だったわけ？」と壁に描いた大きな顔が話しかけてくる

世界が終わりそうな激しい色の夕焼けに窓の外から気づいて「見て！ 世界が終わりそう！」と言っても「本当だね。でも終わらないよ、大丈夫」と社会的にはとくに大人であるらしい僕に微笑まれる

呆れられたくないから、そこで馬鹿げた話をするのはやめて、じゃあ僕は可燃物じゃないんだって思う

人間は燃えて灰になって人間だったものとされるはずだから、僕は燃えずに、でも消えて、世界から記憶ごとなくなるんだって思う

握る手、掴まれる足、最後の子どもが付けた傷痕、停滞する脈拍、見せないことは罪、電子機器はしぶとく繰り返す、これが悪い夢なら時間を巻き戻す